

# 法 医 学

## 1 構 成 員

	平成 24 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
助教（うち病院籍）	3 人	(0 人)
助手（うち病院籍）	0 人	(0 人)
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	1 人	
大学院学生（うち他講座から）	2 人	(0 人)
研究生	1 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	1 人	
その他（技術補佐員等）	1 人	
合計	10 人	

## 2 教員の異動状況

渡部 加奈子（教授）（H12.7.1～19.3.31 助教授；19.4.1～23.3.30 准教授；23.5.1～現職）

野澤 秀樹（助教）（H11.1.1～19.3.31 助手；19.4.1～現職）

権守 邦夫（助教）（H17.1.1～19.3.31 助手；19.4.1～現職）

山岸 格（助教）（H23.7.1～現職）

## 3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 23 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	4 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	6.92	
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0 編	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(6) その他（レター等）	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Gonmori K, Fujita H, Yokoyama K, Watanabe K, Suzuki O: Mushroom toxins: a forensic toxicological review. Forensic Toxicol. 29:85-94, 2011
2. Minakata K, Nozawa H, Yamagishi I, Gonmori K, Hasegawa K, Watanabe K, Suzuki O :A rapid and decisive determination of thiocyanate in blood by electrospray ionization tandem mass spectrometry . Forensic Toxicol. 30:45-50, 2012
3. Hasegawa K, Suzuki O, Gonmori K, Yamagishi I, Nozawa H, Watanabe K: Simultaneous analysis of sildenafil, vardenafil, tadalafil, and their desalkyl metabolites in human whole blood and urine by isotopedilution LC-MS-MS. Forensic Toxicol. 30:25-32, 2012

インパクトファクターの小計 [ 6.92 ]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Kumazawa T, Hara K, Hasegawa C, Uchigasaki S, Lee X, Seno H, Suzuki O, Sato K: Fragmentation Pathways of Trifluoroacetyl Derivatives of Methamphetamine, Amphetamine, and Methylenedioxyphenylalkylamine Designer Drugs by Gas Chromatography/Mass Spectrometry. International Journal of Spectroscopy 2011:Article ID 318148, 12 pages, 2011.

インパクトファクターの小計 [ 0.00 ]

4 特許等の出願状況

	平成 23 年度
特許取得数 (出願中含む)	0 件

5 医学研究費取得状況

	平成 23 年度	
(1) 文部科学省科学研究費	2 件	( 544 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	0 件	( 0 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件	( 0 万円)
(4) 財団助成金	0 件	( 0 万円)
(5) 受託研究または共同研究	1 件	(2,790 万円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	0 件	( 0 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

- ・ 基盤研究C (代表 南方かよ子) 薬毒物錯体混合物のタンデム質量分析によるカラムを使用しない高感度同時分析法 (104万円)
- ・ 基盤研究C (代表 権守邦夫) スギヒラタケ中青酸産生メカニズムと急性脳症発症との因果関係について (440万円)

## 7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	0 件
(3) 学会座長回数	1 件	0 件
(4) 学会開催回数	0 件	0 件
(5) 学会役員等回数	1 件	10 件
(6) 一般演題発表数	1 件	

### (1) 国際学会等開催・参加

#### 4) 座長をした国際学会

1. Osamu Suzuki : 2011 Joint SOFT-TIAFT International Conference & Expo on Forensic and Analytical Toxicology, 2011; San Francisco, California, USA.

#### 5) 一般発表

##### ポスター発表

1. Minakata K, Gonmori K, Nozawa H, Yamagishi I, Kanno S, Hasegawa K, Watanabe K, Suzuki O: Determination of blood cyanide in several poisoning cases. 2011 Joint SOFT-TIAFT International Conference & Expo on Forensic and Analytical Toxicology, 2011; San Francisco, California, USA.

### (3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

#### 渡部加奈子

日本法医学会評議員

日本法中毒学会評議員・幹事

#### 権守邦夫

日本法医学会評議員

日本法中毒学会理事

日本中毒学会評議員

#### 鈴木 修

日本法医学会評議員

日本法中毒学会理事長・評議員

日本医用マスメートル学会副理事長

The International Association of Forensic Toxicology (TIAFT) 地域代表者

日本学術会議連携会員

内閣官房「重大ケミカルハザード専門家ネットワーク」メンバー

## 8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	1件	0件

### (1) 国内の英文雑誌の編集

鈴木 修：Forensic Toxicology, Chief Editor（インパクトファクター 2.306）

### (2) 国内外の英文雑誌のレフリー

権守邦夫：Food and Chemical Toxicology（USA） 1回

中毒研究（日本） 1回

南方かよ子：Analytical and Bioanalytical Chemistry（Germany） 1回

## 9 共同研究の実施状況

	平成23年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	1件
(3) 学内共同研究	0件

## 10 産学共同研究

	平成23年度
産学共同研究	1件

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

### 1. Post column switching large volume injection

大容量注入によるナフタレンならびにパラジクロロベンゼンのGC-MS分析に関する研究

ヘッドスペース（HS）抽出法とは、分析対象である希釈した全血・尿をバイアル瓶に入れ、セブタム付キャップで密栓し、加熱すると気相に揮発性物質や半揮発性物質が蒸発して、液相から抽出されるものである。我々は、多くの揮発性物質や、半揮発性物質を含んだ気相を多量（約5ml）バイアル瓶から抜き取り、カラムと0度以下の低温にし、ガスクロマトグラフィー（GC）にかけ、大容量注入GC法として多くの論文を発表してきた。但し、この大容量注入法をガスクロマトグラフィー質量分析法（GC-MS）にかけると、検出器の質量分析装置（MS）に分析対象分子が空気分子と衝突し、MSがシャットダウンをおこしてしまい分析は不可能であった。しかし我々は試行錯誤の末、以下の文章に述べるように、ガス経路を変え、みずから二つの部品を作成する事でこの実験に成功し、良好なピーク形状、感度を得た。これらの成果はAnalytical Toxicology（IF 5.21）に昨年投稿しアクセプトされた。これは独創性があり、国際的にも汎用できる実験である。

今後はこの装置を使用し、色々な揮発性有機薬毒物や、非揮発性の覚せい剤などの分析にも挑戦し、比較的の前処理が簡便なヘッドスペース法をもちいて色々な薬毒物の分析法を確立していくつもり

である。尚、現在成功した機器は Agilent 製であるが、島津製作所からもシステムは違うが同じ実験を試みて欲しいと希望があり、鋭意試行中である。(下記参照)

(渡部加奈子、藤田博紀、長谷川弘太郎、阿民勿日他、鈴木 修 他)

## 2. 薬物摂取とカリウム製剤点滴により死亡した珍しい心中例

県内にて、向精神薬3種類とアスパラカリウム製剤(アンプル)点滴静注及び注射筒による急速静注により死亡した珍しい心中例を司法解剖し、すべての薬物の成分とカリウムの血中値・尿中値を自ら検出・同定、測定を行った。カリウム製剤による自殺と包括的かつ詳細な解剖・分析例は非常に珍しいケースであったため、論文にまとめ、国際誌に投稿した。

(渡部加奈子、長谷川弘太郎、野澤秀樹、山岸格、鈴木修)

## 3. スギヒラタケ中青酸産生メカニズムと急性脳症発症との因果関係について

2004年を中心に日本海側の地域で発生した原因不明急性脳症については、スギヒラタケの関与が疑われた。スギヒラタケは古くから食用きのことして利用されてきたもので、スギヒラタケと急性脳症の因果関係についての明確な証明はなされていない。我々はスギヒラタケが青酸を産生するキノコであることを証明し、青酸が急性脳症発症の引き金となっているのではないかとの推定の元、その発症メカニズムについて検討を行っている

(権守邦夫、長谷川弘太郎、藤田博紀、鈴木修)

## 4. 種々の薬毒物混合物を各々の錯体として極性有機溶媒で同時に抽出し、タンデム質量分析法を用いて、カラムを使用することなく高感度に同時分析する方法の開発

6価クロム等の金属イオン、3価ヒ素、 $\text{CN}^-$ 等は水溶性が高く、エレクトロスプレーイオン化(ESI)-質量分析(MS)法による実用レベルの報告はなかった。我々は水溶性が高い種々の薬毒物を錯体として極性有機溶媒で抽出し、ESI-MS装置に導入することにより高感度検出を可能にしてきた。この研究の過程において、錯体の生成条件に規則性があることに気付いた。この事は性質が類似している一群の化合物は同一条件で各々の錯体の生成と検出が可能であること、即ち同時分析が可能であることを示唆している。例えば、シアン中毒時、生体内では解毒作用により、シアンがチオシアンとなるので、1つの検体から両者を同時に測定することが望ましい。 $\text{I}^-$ 、 $\text{SCN}^-$ 、 $\text{ClO}_4^-$ のイオンも同時分析可能である。甲状腺がヨード( $\text{I}^-$ )を取り込む際に $\text{SCN}^-$ 、 $\text{ClO}_4^-$ が妨害をすることから、生体内における反応の基質と阻害物質が同時に測定できることが判明した。このように同時分析は、時間、費用の面で研究者に利点をもたらすのみならず、生体反応についての知識を深めることができる事がわかり、MS-MSを用いた同時分析を行い、併せて今までの方法を広く深く発展させることができる。

(南方かよ子、権守邦夫、鈴木修)

## 13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

12 参照

## 14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1. 数年前より、自ら分析機の一部を改良しながら一連の研究を展開してきたポストカラムスイッチング-Large volume injection の GC-MS への応用のテーマにおいて、H21 年 11 月にリース購入した Agilent GC-MSD にて Deans スイッチとガス配管を自ら改良し、性能に不満のあったガス分子をためるコイルと、装置に大気不要な空気を逃がすスイッチングバルブを自ら作成し取り付けた。これらのアイデアにより、これまでは不可能だった 5 mL の気相を注入することが可能になった。注入口で高温ガスとなった分子を 50 度ほどの低温のキャピラリーカラムに液状にトラップさせている間にスイッチングバルブをオープンし、不要な気相をキャリアガスのヘリウムと一緒に大気中に解放してしまう。0.2 秒後、スイッチングバルブを閉め、沸点近傍で気体分子となって移動してきた分析対象分子のみを MS へ送ることに成功した。一昨年、一時話題になったナフタレンと *p*-ジクロロベンゼンの分析実験にこの方法を応用し、MS がシャットダウンを起こさず正常に作動し、検出ピーク形状、再現性、回収率いずれも良好であった。内部標準物質にはそれぞれの同位体(*d*体)を用いた。

この実験を通して、想定以上に Deans switch という特殊金属性の流路切り替え部品が分析過程での汚染や夾雑物からの影響が少ないことが判明した。改良の費用は安価であり、汎用性が高く、設計や拡張も容易であった。これらの成果について取りまとめを行った後 *Analytical Chemistry* に投稿した。現在、ガソリン成分や灯油成分の分析について更に実験中である。(渡部加奈子、藤田博紀、長谷川弘太郎、阿民勿日他、鈴木 修 他)

2. 島津製作所より同様の研究を自社の分析機でも行ってほしいと H22 年 1 月に GCMSD が 3 年間無料でレンタル納品され、部品の改良等について島津製作所と相談しながら共同研究を行っている。(渡部加奈子、藤田博紀、長谷川弘太郎、阿民勿日他、鈴木 修 他)
3. 種々の中毒症例における血液中シアンの定量について、国際法中毒学会で発表したところ、多くの方々から関心を持たれ、「どうしてこのような方法を思いついたのか」との質問も 2 名から頂いた。また、*Anal Bioanal Chem* にて発表した。チオシアン定量については *Forensic Toxicol* にて発表した。(南方かよ子、権守邦夫、渡部加奈子、鈴木修)

## 15 社会貢献

静岡県内で発生した司法解剖約 200 体

静岡県頭部への出張検視約 150 体

警察学校への講義

司法修習生の講義

きのこ中毒に関する講演会(市民セミナー)